座長コラム「長岡の風」

第27回　２０２６年１１月

「ふるさと」

長岡経済・産業連携会議（座長：髙野裕）

小さい頃

小さい頃、自分の中のまちのスケールは自分が歩いていけるサイズであった。それ以外は未知の世界だ。自転車に乗れるようになると、自転車でいけるサイズ、それもせいぜい１～２時間の距離だ。そして学校に入ると修学旅行で連れて行ってもらったあたりまで世界が広がる。要するに、自分の体験した距離までしかわからない。

「隣の芝生」

それと同じことで、自分の住んでいるまちは、それが当たり前と思って住んでいる。他を知らないから、良いも悪いもわからない。それが、だんだん大人になって他のまちを見たり聞いたり調べたりすることで、自分のまちが良いまちかどうかわかり始める。最初は自分の住んでいたまちよりも他のまちの方が良く見える。「隣の芝生は青い」と同じことだ。

恩返し

だが、よくよく見てみると自分の生まれ故郷がよく見えてくる。それは自分の原体験がそこにあり、小さい心に感動を与えてくれた場所やモノやヒトがそこにあったからだ。心に響くものが自分の生まれ故郷にあった。その自分を育ててくれた原点は生まれ故郷だった。だから同じ故郷で育つ若い人にも、少しでも良い感動を与えてあげることができないかと願う。それが故郷に対する愛情であり、恩返しなのだと思う。

「令終会」

今から１００年ほど前の長岡人も同じような気持ちがあったのだろう、いやそれ以上の思いがあって、「令終会」を立ち上げ悠久山公園を作った。そんな先人たちが長岡の経済界にいたということを思い浮かべる。そして、その事実を知った戦後の若者が「令終会」の思いを引き継いで「平成令終会」を立ち上げ、今度は長岡の信濃川を挟んで悠久山と反対側の西山丘陵に「雪国植物園」を作った。その「雪国植物園」も開園して４０年を迎えたという。

ミライエ全館オープン

この度、長岡のまちなかでミライエ全館オープンのイベントが開かれた。このミライエも長岡の新しい時代を目指して、経済界と行政が共に長岡のために活動しようということで同じビルの中に集まってできた。この全館オープンまで１０年以上の年月を経て、ようやく実現した活動の場所である。共に活動しようという趣旨ではあるが、その実際はこれからにかかっている。

「ふるさと」

なんとか経済界と行政、さらには大学と一体となった「素晴らしい経験・体験」のできる場所として、ここに若者が集い、良い感動を体験し、それが長岡というまちの原体験として若者の心に刻むことができ、長岡という「ふるさと」を記憶に残してほしいと願う。